

卒業論文要旨(昭和57年3月卒業)

福岡市の都市機能に関する地理学的考察

河原修子

1. 研究の目的

広域中心都市として、東京や大阪などの国家都市に続く都市機能を果たす福岡市の内部構造をみていきながら、将来の動向をさぐっていく。

2. 研究の枠組

第1章では、福岡市の地理的環境を概観していくとともに、福岡の九州における中心性の推移と、福岡市の発展という2つの視点で歴史を概観する。

第2章では、福岡大都市圏の範囲で、近年における福岡の発展をみながら、市と周辺都市圏の結びつきと市の中心性を考察していく。

第3章では、福岡市の内部構造を主成分分析によって分析し、そこから得られた都心と副都心の各地域について、それぞれの性格を考察していく。

第4章では、第1章～第3章の研究をもとに福岡市のこれからの発展動向をさぐっていく。

3. 研究のまとめ

福岡市は現在、広域中心都市として多大な人口集積と都市機能の集積を誇っている。当市の成立・発展、そして性格に大きな影響をおよぼしている地理的条件として、

- 1 中国大陸や朝鮮半島に近い
- 2 中央から離れている

という2つの事実があげられる。

1の事実は、当地域が古代、我が国において文化の先進地であった要因でもあるし、また第2次大戦以降、現在に至る諸機能の集積をみせる原因にもなっている。

2の事実は、ある意味で都市の発展の阻害要因でもあるが、近年の交通機関の発達によって時間的距離は短縮され、また中央資本の集積飽和による諸機能地方分散傾向のなかで九州の中心として、その役割が高まってきている。

福岡市において都市機能の集積が高まるなかで、その内部構造にも次第に変化がみられる。それはまず、福岡が市という行政範囲を超えた都市圏の範囲で発展をはじめていることである。そして都心と呼ばれる地域においても、集積飽和により天神一点集中型から役割分担傾向が強まってきている。それは新幹線開通前後に特に顕著で、卸売業では博多駅周辺の事業所数の伸びが高く、支店立地が相次いだことが証明される。また、新しく副都心の形成もみられるが、これは都心の機能飽和とともに、副都心における後背地の成長も大きく関係している。こうした内部構造の変化は、福岡市の重要性が増すなかでますます強まっていくものと考えられる。

地方都市のよさは、その歴史に裏うちされた個性を失っていないことではないだろうか。福岡市が、これからますます巨大化していくなかで、単にミニ東京化することなく、市の独自性を失わずに発展していくことを期待する。